たな段階への移行を真剣に考える時を迎えたと言うべきであろう。

「近現代」の編纂事業を終えるにあたって

編さん委員　伊東　壯

早いもので、甲府市史の編纂事業が始まって、もう十年の歳月が経ち、私が編纂を担当した「近現代」の通史発刊をもって、史料編と通史は完結することになる。近現代の編纂委員に歴史が専門ではない私が何故選ばれたのか経緯はよく知らないが、近年の甲府市政に多少とも関わりあって来た者として、保有した史料と体験を活用させることをねらっての起用であったのだろうと思っている。ところが、その私が、大学で評議員、教育学部長などの多忙な職に就き、最初の数年間は殆ど市史の仕事に深く関わり合う暇がなかった。それでも竹山護夫山梨大学助教授が共に編纂委員として、副部会長をつとめられ、私はこの専門家がいることですっかり安心していたが、近現代の目次案をつくった後、昭和六十二年、先生は早逝された。これは思いもよらぬ痛恨事であり、近現代部会の一つの危機であった。しかし、幸いなことに、専門委員として有泉貞夫商船大教授、島袋善弘県立女子短大教授、齋藤康彦山梨大教授らの専門家が加わり、資料収集、執筆はもちろん編集にまで援助を賜ったことは、特に「近代」の史料編、通史発刊に対して決定的な意味をもった。

「現代」については、島袋教授を除いては、殆ど専門外の執筆陣であった。専門家の集団であれば、個々人の執筆を大事にし、編纂者はよほどのことがないかぎり、クレームはつけないというのが、一般の編纂といえよう。しかし、専門外の人々の集団となると、そうはいかない。だが、よくしたもので期せずして現代部会執筆陣の中では合議制が生まれた。史料編をつくるにあたっては、一つの史料に委員全体が目を通し、採用、不採用を決める方法をとった。通史については、何人かが目を通し、かなり徹底的にチェックした。その代わり、会議、会議の連続であり、近現代部会の回数は他のどの部会よりも多くなった。或いはこうした非専門家集団のやりかたは、評価が確定しない「現代」を扱うにはよかったのかもしれない。そして、いつの間にか、委員の間には親愛感が醸成され、忘年会などでの近現代部会総出のカラオケは、偉観（遺憾？）となった。こうして、史料編「現代Ⅰ」、「現代Ⅱ」、「通史」も完成していった。

しかし、こうした委員たちの活動を陰でしっかりと支えていたのは、事務局であった。高木主幹は、作業スケジュールや内容について、学者を相手にするにはどうかなと思われるくらい、厳格、厳密であった。でも、この燃え盛る牽引力がなければ、とても今日までの完成は出来なかったと断言できる。同時に数野さんを始めとする何十人かの職員の労を厭わぬ努力に対しても最大限の賛辞を呈したい。まったく、ローマは一日でも、一人でも成らなかったのである。終わりに、竹山先生に事業の完成を報告し、ご冥福を心から祈る。

市史編纂事業を終えて

編さん委員　白倉一由

市史編纂事業を終えて私はほっとしている。市史編纂は私にとって魅力あるものであった。新しい発見、未知なる世界に踏み込んで